

## ひきこもりに対応した効果的なアウトリーチ実践研究

### －「発見」「誘導」「支援」を結合する取り組みから－

NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク 田中 敦 (No.2891)

[キーワード]：ひきこもり、サテライト事業、アウトリーチ

#### 1. 研究目的

ひきこもりの高齢化を生み出す大きな背景のひとつにひきこもりの長期化が挙げられる。周知のとおり北海道は他の都府県とは異なる広域性を有する地域の特性をもっている。ひきこもり当事者に必要とされる社会資源サービスはとかく政令指定都市である札幌市に一極集中しており、地方圏の支援は置き去りになりがちとなっている。こうしたひきこもりの長期化を生む理由が「深く悩んで考えた末の一つの本人による決断として在宅に留まり続け、これとって自分にマッチングする利用可能なサービスが残念ながら地域にはない」という閉塞感や停滞感によるものであるとすれば、今日のひきこもりの長期化を単に本人や家族の自己責任のみに転嫁するだけではなく、地域の社会資源の掘り起しや開発にも目を向け努めなくてはならないといえるのではないだろうか。

本研究は「ひきこもり支援で使える制度や社会資源の不足による支援の困難性が全国的に共通する課題」（西元祥雄「ひきこもり支援におけるケアマネジメント・プログラム導入の検討－ひきこもり地域支援センターの実態調査を踏まえて－」『社会福祉学 vol152-4』日本社会福祉学会 2012 年）であり、これら課題がひきこもりの長期化を生み出しているという仮説のもと、北海道内では札幌市に次ぐ中核都市でありながらも、ひきこもり支援サービスが不足していた A 市への具体的な実践研究（2010 年度～2014 年度）を通して明らかにし考察することを目的とする。

#### 2. 研究の視点および方法

ひきこもり支援で問われている 40 歳を超える中高年層に位置するひきこもり当事者の支援をその重要な担い手となりうるピアスタッフの視点から問う。ひきこもり支援プロセスは「発見」「誘導」「支援」「出口」「継続」の 5 つの段階に区分されると考えられるが、中高年層に対する支援の中心は「発見」「誘導」「支援」である（H22 年度厚生労働省社会福祉推進事業「地域主体による中高年ひきこもり支援の効果検証及びベストプラクティス発掘に基づく手法の開発・共有化事業」(榎野村総研 2011 年 3 月) ことからこれら上位 3 点を結びつける方法として「ひきこもり地域拠点型アウトリーチ」（田中敦「苦労を分かち合い希望を見出すひきこもり支援 - ひきこもり経験値を活かすピア・サポート」学苑社 2014 年）を用いて実践研究を行なった。この方法は地域というソーシャルワーク実践体系

の「メゾ領域」に焦点を当てるものであり、「メゾ領域」のアプローチを通して発話がとりにくいひきこもり当事者の思いを汲み取る「ミクロ領域」へ、さらには安心して集うことができるひきこもり当事者の居場所づくりとしての「マクロ領域」に接近することをねらいとしている。

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従う。とくに本研究では第2指針内容Bに関係して、本人や家族の了解のもと特定地域や個人が特定されないよう配慮して行なった。

### 4. 研究結果

2010年度から2014年度まで計18回にわたり中核都市A市にアウトリーチ実践研究を試みた。まず2010年度から2012年度まではひきこもり当事者の「発見」の必要性から札幌市で通常行っていた自助会をA市においても同様に開催するサテライト事業を実施した。その結果、市内近郊からひきこもりのわが子に悩む家族が多く集まった。A市には20年近くの実績をもつ不登校の家族会や市内近郊の保健所主催の家族会も存在していたが参加者は少なく支援に行き詰まり感をもつ事例も少なくなった。またサテライト事業では単なる講演会に終わらない相談機能を併せ持つグループワークを展開してきたが、講演会と比較してもグループワークへの参加者は少なかった。2013年度は「発見」から「誘導」への支援に移行しサテライト事業に参加した家族延べ66名のうち、ある程度家族対応ができるようになった世帯に希望を募り、ひきこもり当事者本人との接触を試みる事業を実施した。その結果、1名について個別アウトリーチが可能となった。2014年度は「誘導」をさらに深めつつ「支援」を視野に入れた活動を検討した。具体的には他者と会うことのできないひきこもり当事者に向けた絵葉書を活用したアウトリーチであり、もう一つは外出できるようになったときいつでも安心して集うことができるひきこもり当事者会をA市にも創設するイベントを開催した。その結果、絵葉書によるアウトリーチ希望者10名、うち1名からは返信があったほか、3名からは事後評価調査票の回収を得た。さらに2015年1月にはA市に初めてひきこもり当事者会が発足、2月からは定例化し当初の目的は達成した。

### 5. 考察

本研究により①ひきこもりの「発見」「誘導」「支援」に結合するメゾ領域へのアウトリーチの意義が見出されたこと、②A市保健所など関係団体に関心を寄せ新たな連携構築や社会資源開発として不登校の家族会がひきこもりも含めた会に改組転換したこと、③グループワーク参加者が少数だったことは地方圏に行くほどひきこもりを知られたくない感情があることが推察されたが回数を重ねることでお互いの信頼関係をつくるきっかけとなったこと、④実践活動なかでピアスタッフの役割が重要な働きをしていたことが挙げられる。